

## 茨城県における後期更新世の非海成層由来の花粉記録を用いた古気候復元 Paleoclimate reconstruction based on pollen records from Late Pleistocene non-marine sequence in the Ibaraki Prefecture

池田 悠人<sup>1\*</sup>, 岡田 誠<sup>2</sup>, 菅谷 真奈美<sup>1</sup>, 大井 信三<sup>1</sup>  
Yuto Ikeda<sup>1\*</sup>, Makoto Okada<sup>2</sup>, Manami Sugaya<sup>1</sup>, Shinzou Ooi<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 茨城大学大学院理工学研究科, <sup>2</sup> 茨城大学理学部

<sup>1</sup>Graduate school of Science and Engineering, Ibaraki University, <sup>2</sup>Department of Science, Ibaraki University

本研究では花粉分析を用いて茨城県内における海洋同位体ステージ (MIS)6 ~ 5e の時代の古気候を定量的, また平面分布的に復元することを目的とし, 分析のための試料を県内 3ヶ所の露頭 (Site1 ~ Site3) において計 47 層準より採取した。試料に前処理と検鏡作業を行った結果, 議論に値する数の花粉化石を抽出することができたのは 47 層準中わずかに 14 層準のみであり, 同定した花粉・胞子化石は全部で 33 分類群であった。

分析結果に MAT を用いて古気候 (TANN: 年間平均気温, MTWA: 最暖月平均気温, MTCO: 最寒月平均気温) を復元した。復元結果はいずれも年代を重ねるごとに低下傾向を示し, 約 130~127ka の茨城県行方市は現在の北海道からサハリンの気候へと変化していったことが示されたが, この結果は本地層が氷期から間氷期への移行期の堆積物であるという見解と矛盾した。この矛盾に対して, 本復元結果は氷期から間氷期への移行中の寒冷化ショートイベントをみていると推察された。

キーワード: 花粉分析, 古気候, MIS6/5 境界

Keywords: Pollen analysis, Paleoclimate, MIS 6/5 boundary